

大府市議会

議長 鈴木 隆 様

大府市議会厚生文教委員会

委員長 浅田 茂彦

# 報 告 書

～幼保児小中連携教育の推進について～

平成27年3月

大府市議会 厚生文教委員会

## 1 はじめに

当委員会は、平成26年6月17日、3年目を迎えた大府市幼保児小中連携教育の指針「きらきら」の現状及び課題を把握し、政策立案、政策提言を行うため、所管事務調査として「幼保児小中連携教育の推進について」の調査を行うことに決定し、以降、閉会中を中心に調査を行ってきた。

このたび、調査研究の成果を「大府市への提言」として取りまとめたので、その内容を以下のとおり報告する。

## 2 調査の方法

調査については、閉会中を中心に、市職員を講師とした勉強会を行い、大府小学校教職員、大府市青少年問題協議会健全育成部会推進委員会及び大府小学校PTA役員との意見交換会、市外自治体への視察調査等を行った。

### (1) 平成26年6月17日（火） 厚生文教委員会

- ・大府市幼保児小中連携教育の指針「きらきら」の現状及び課題を把握し、政策立案、政策提言を行うため、所管事務調査として「幼保児小中連携教育の推進について」の調査を行うことに決定した。
- ・本調査については、議長に対し、調査研究が終了するまで、閉会中の継続調査の申出をすることに決定した。

### (2) 平成26年7月25日（金） 厚生文教委員協議会（勉強会）

- ・教育委員会事務局指導主事を講師とし、「大府市幼保児小中連携教育の指針『きらきら』について」の勉強会を行った。

### (3) 平成26年7月25日（金） 大府小学校教職員との意見交換会（委員派遣）

- ・教育現場の声を聴くため、委員7名全員で「大府小学校教職員」と「幼保児小中連携教育の推進について」をテーマとし、意見交換を行った。

### (4) 平成26年8月21日（木） 市内団体等との意見交換会（委員派遣）

- ・委員7名全員で市内各地区の青少年健全育成活動を行っている「大府市青少年問題協議会健全育成部会推進委員会」と「幼保児小中連携教育の推進について」をテーマとし、意見交換を行った。

- (5) 平成26年8月29日（金） 厚生文教委員協議会
- ・大府小学校教職員及び大府市青少年問題協議会健全育成部会推進委員会との意見交換会について、各委員に所感を求めた上、委員間で意見交換を行った。
- (6) 平成26年10月7日（火） 市内団体等との意見交換会（委員派遣）
- ・委員7名全員で「大府小学校PTA役員」と「幼保児小中連携教育の推進について」をテーマとし、意見交換を行った。
- (7) 平成26年10月29日（水） 市外視察調査（委員派遣）
- ・委員7名全員で岐阜県高山市の「幼保小中連携教育について」調査を行った。
- (8) 平成26年10月31日（金） 市外視察調査（委員派遣）
- ・委員7名全員で石川県羽咋市の幼保小中連携教育の取組を含めた「羽咋教育ビジョンについて」調査を行った。
- (9) 平成26年11月26日（水） 厚生文教委員協議会
- ・大府小学校PTA役員との意見交換会、岐阜県高山市及び石川県羽咋市への視察調査について、各委員に所感を求めた上、それぞれの調査内容について委員間で意見交換を行った。
  - ・これまでの調査研究の内容を踏まえ、大府市政への反映、提言等について、委員間で意見交換を行った。
- (10) 平成27年1月19日（月） 厚生文教委員意見交換会
- ・委員間で意見交換を行い、報告書の内容について検討した。
- (11) 平成27年2月4日（水） 厚生文教委員意見交換会
- ・委員間で意見交換を行い、報告書の内容について検討した。
- (12) 平成27年2月4日（水） 厚生文教委員会
- ・報告書の内容を決定し、本会議で報告することとした。

### 3 大府市への提言

#### (1) 本市の現状

本市では、子どもたちの心身ともに健やかな育ちをサポートし、保育園・幼稚園から小学校、小学校から中学校へと進む際に起こることのある「小1プロブレム」や「中1ギャップ」等の問題を解消し、それぞれの段階への移行が不安なくスムーズに行われていくよう、平成18年度に「幼保児小中連絡会議」を立ち上げた。ここでは、保育園・幼稚園、小学校、中学校等の教育に関わる関係機関の代表者が集まり、情報交換や様々な連携が行われてきた。

そして、平成24年度からは、そこに、児童（老人福祉）センターを新たに加え、保護者や地域にも子どもたちの育ちのサポートに協力してもらうため、「幼保児小中連携教育の指針『きらきら』」を作成した。

この指針は、大府市で育つ子どもたちへの教育の「バイブル」として、「きらきら輝くように育てほしい」という願いを込めて作成され、子どもたちの育ちにおいて、家庭や地域の協力体制についても書かれている。

当委員会は、この「幼保児小中連携教育の指針『きらきら』」を推進し、これからの大府を担う子どもたちが「いつも明るく、自発的にあいさつできるようなまち」を目指すため、大人たちが何をしなければならぬのかを考えることは重要命題であるとの結論に至った。

#### (2) 今後、本市に求められること。

当委員会における1年間の調査研究の結果、以下の5点を「幼保児小中連携教育の推進のためのアプローチ」として提言する。

##### ア 幼保児小中連携教育の指針「きらきら」のPRをもっと強化する必要がある。

意見交換会を行う中で、大府小学校PTA役員や大府小学校教職員からは、「きらきら」があることにより、「目的意識が共有できる」、「子どもたちへの教え方がわかりやすくなった」、「子どもへの声掛けや、関わりを持つきっかけになっている」等、好意的な意見が多く聴かれた。

一方、地域で子どもを見守る立場である「大府市青少年問題協議会健全育成部会推進委員会」の方からは、「作成された当時、教育委員会から説明はあったものの、委員交代の際の引継ぎの際には『きらきら』についての説明は特になく、存在すら知らなかった」や、「存在は知っているものの、どのように関わりを持って活動するものなのかわからない」という意見が出るなど、教育関係者と保護者以外にはあまり周知がされていない現状が確認できた。取組の開始当時、広報おおぶへの記事掲載やケーブルテレビを利用したPRを行ったとのことであるが、「きらきら」の推進のためには、子育てを終えた世代の地域住民にも取組を

理解し、協力してもらうことは大変重要であると考えており、市全体で大府市の子どもたちを育てていくべきであるという点からも、更なるPRの必要性を感じた。

そこで、この「きらきら」をより推進していくため、例えば、過去に作成されたケーブルテレビの映像などを活用し視覚に訴えたり、各種団体の集会や児童（老人福祉）センター、公民館等、地域の方が集まる場所で、更なるPRをする必要がある。

#### イ 「きらきらチャレンジカード」の見直しを検討する必要がある。

保護者からの意見を聴く中で、「きらきらチャレンジカード」は認知度は高く、取り組まれていることがわかった。ただし、学齢や家庭によって、取組の姿勢や学校への提出状況にばらつきがあることもわかり、より多くの幼児、児童、生徒、保護者に積極的かつ自発的に取り組んでもらうためにも、取組の方法や頻度、取組の重点項目やカードの内容等について、見直しをするべきと考える。

そのためには、まず、取り組んでいる児童、生徒、保護者の声を聴き、改善の必要性や改善すべき箇所を把握することが不可欠であると考ええる。

#### ウ 幼保児小中連携教育の推進のため、検討組織を立ち上げる必要がある。

「きらきら」のPRの強化や「きらきらチャレンジカード」の見直しなどを行い、更に幼保児小中連携教育を推進するためにも、当初、幼保児小中連携教育の指針の作成時に組織されていた「大府市幼保児小中連携教育研究会」のような、幼保児小中連携教育の推進を検討する組織を再度、立ち上げるべきである。その際、委員の構成は、学校関係者、保護者、地域、行政担当者等で構成されるべきであり、行政においては教育委員会だけでなく、地域と密接に関わる所管部署等からも横断的に委員を選ぶべきと考える。

#### エ あいさつ運動を広める必要がある。

心の通い合った地域づくりを目指すためにも、あいさつは必要であり、あいさつの大切さやすばらしさを改めて確認し合うことは重要である。市内団体等と意見交換会を行う中で、明るく、自発的にあいさつをする子どもを育てるためには何が必要かを話し合ってきたが、「まずは大人が積極的にあいさつをし、子どもに見本を見せていくことが大変重要である」「顔見知りでないとあいさつをしない子もいる」という意見がどの団体からも聴かれた。大人、子どもにかかわらず、明るく、自発的なあいさつが行われるようになることは、心身ともに健やかな人、地域、まちを育てることにもつながっていくと考えられる。市で一丸となって、豊かな心の子どもたちを育て、健康的で明るい地域やまちをつくっていくために

も、あいさつ運動を広めることは重要であるとする。

そのためには、「きらきら」で取り組んでいる「市内一斉あいさつ運動」に、より多くの市民に参加してもらえるように働き掛けていくことが必要である。

また、市職員は、日常の業務の中や地域での生活において、自らが率先してあいさつするよう努めるべきである。

さらに、幼児、児童、生徒に対しては、あいさつの大切さについて、今一度認識してもらい機会をつくり、「あいさつをされたら返す」という姿勢を伝える場を持つべきである。自発的なあいさつが難しくても、あいさつをされたら返すという行為が徹底されていけば、あいさつの輪は広がっていくと考える。

#### **オ 保護者や地域を「子育て」に巻き込む仕掛けづくりが必要である。**

実際に子どもを教育する立場の小中学校や子育て世代の保護者だけでなく、子育てを終えた世代の地域の方々も一丸となって子どもの育ちをサポートする体制は、今後、大変重要になってくると考える。

大府小学校PTA役員との意見交換会では、大府小学校では「大府小とうちゃんず」という組織を立ち上げており、遊具のペンキ塗り等の愛校作業を行ってもらい機会を設けているという事例を伺った。普段は仕事で学校行事に関わるのが難しい立場の父親に、学校へ足を運んでもらい、子育て意識の共有をしてもらう仕掛けとして有効であり、この取組を通じて、父親同士の顔の見える関係を築くこともできる。

また、「学校花壇の管理について、ガーデニング知識をお持ちの方からアドバイスをもらえれば」という意見が出るなど、学校を介して、子どもと保護者と地域が協力し、顔の見える関係を築いていくことを望む声もあったことから、実際に子どもとの関わりがある教職員や保護者だけでなく、地域の方も学校行事に巻き込んでいく仕掛けをつくっていくことが必要であるとする。

そのためには、市内に七つあるコミュニティ推進協議会内の団体同士の交流や意思疎通が必要である。

#### 4 おわりに

今回の所管事務調査を通じて、当委員会では活発な協議が行われてきた。

将来の大府を担う子どもたちの、真に明るい健やかな育ちのため、学校だけでなく、行政、家庭、地域が一丸となって「子どもを育てる」姿勢を持つことは、教育にとっても重要であるとともに、それぞれが、それぞれの立場で子どもに関わり、多面的に子どもを見守ることによって、安心安全なまちの形成にもつながっていくと考える。

子育て世代が多く住む本市において、子どもを介した連携を広めていくことは、活気ある明るいまちづくりにもつながり、「幼保児小中連携教育の指針『きらきら』」をより強く推進していくことは、市政においても大変重要なことと言える。

「見知らぬ人には、ついていけない」と言われている昨今、子どもが自発的にあいさつをするためには、地域の行事などを通して、大人が積極的に子どもたちと顔見知りになり、安心してあいさつが交わせる関係づくりが重要である。

「先ず隗より始めよ」、我々議員自らが率先して、あいさつをしていかなければならない。

最後に、市内団体等、執行部を始めとする皆様の御協力により調査を終えることができたことに深く感謝申し上げ、本報告書の結びとする。

## 厚生文教委員会委員名簿

(平成26年5月9日～平成27年4月30日)

| 役職名  | 氏名    | 所属会派  |
|------|-------|-------|
| 委員長  | 浅田 茂彦 | 自民クラブ |
| 副委員長 | 三宅 佳典 | 市民クラブ |
| 委員   | 大西 勝彦 | 市民クラブ |
| 委員   | 久永 和枝 | 日本共産党 |
| 委員   | 酒井 真二 | 自民クラブ |
| 委員   | 窪地 洋  | 公明党   |
| 委員   | 深谷 直史 | 自民クラブ |

(備考)

正副委員長のほかは、議席番号順